総合的な学習の時間の記録

―― 探究的な学びを実現するために ――

前シンガポール日本人学校中学部ウエストコースト校　教諭
山形県鶴岡市立鶴岡第一中学校　教諭　佐　藤　諒　平

キーワード：シンガポール、総合的な学習の時間、職場体験、国際理解、修学旅行

1．はじめに

シンガポール日本人学校中学部の教育目標は、21世紀を生き抜く日本人として、「豊かな国際感覚を持ち、世界の人々とつながりあおうとする人材の育成」である。この教育目標のもと、5つの教育の柱を設定し、実践を行っている。5つの柱は次のとおりである。

①「生きる力」を育むための基礎基本の徹底	④ICT教育
②英語教育の充実	⑤家庭・関係機関との連携
③国際理解と現地校交流の推進	

これらを踏まえ、総合的な学習の時間では、「探究的な学習」「主体的・対話的で深い学び」「国際社会の中での自己の生き方を考える」という3つのキーワードを掲げて、学習活動を展開した。

1年時には「シンガポールとわたし」というテーマのもと、シンガポールの環境や経済、産業、歴史や文化といった分野に分かれて調査を行い、シンガポールへの理解を深める学習を行う。シンガポールを知り、さらにはそこで生活する自分の生活や行動を振り返ることを目指している。

2年時には「アジアとわたし」というテーマのもと、「職場体験学習を通しての学習」と「修学旅行を通しての学習」の二本柱で学習を展開する。毎年、シンガポールにあるたくさんの日系企業に協力していただき、職場体験活動を実施している。実際に働いている現場を訪問し、2日間の体験活動を行うことは、生徒にとって将来につながる貴重な経験となっている。修学旅行ではタイやベトナムを訪問することが多く、アジア地域へと学びの範囲を広げて学習を行う。(平成30年度は、ベトナムを訪問した。ベトナムについての理解を深めつつ、「これから自分はどう生きるか」について一人ひとりが考えることができた)

3年時には「国際社会とわたし」というテーマのもと、国際社会における諸問題について調査を行い、自分はどのように関わっていくか、どんな役割を果たせるかを考え、卒業論文の形でまとめる。

平成30年度、私は第2学年を担当した。第2学年は2学期に職場体験が行われ、3学期には修学旅行がある。同時進行でたくさんの準備を行う必要があり、ともすればすべてが中途半端になってしまいそうな可能性もあった。しかし、学年団はじめたくさんの教職員から協力をもらい、また保護者や事務局、さらには旅行業者といった関係機関からも強力なバックアップをいただくことで、学びを深めることができた。生徒とともにたくさんの疑問文をつくり、ともに考え、ともに話し合い、ともに解決した時間は、私のかけがえのない財産となった。

2．「探究的に考える」とはどういうことか（4月～5月）

(1) 課題と学習内容

課題：「中学生のわたしが（　　）をがんばれば、大人になったわたしは幸せになれる」この仮説を検証し、根拠を示して説明しなさい。

4月、最初の1時間を使って、総合的な学習の時間の目標やテーマ、学習のスケジュールなどを生徒へ伝えた。さらに、「探究的に考える」とはどういうことか、生徒と教員が一緒になって考え、話し合う時間を設けた。そ

して、最初の課題として、生徒一人ひとりが先述の一文を完成させた。「勉強をがんばる」「たくさんの人と関わる」「行事や部活動に積極的に参加する」など、たくさんの仮説を立てることができた。その仮説は正しいのか、自分の力で調査を行い、検証して報告する、という流れで学習をすすめた。たくさんの疑問文を作ることから学習がスタートすることを何度も何度も生徒へ伝えた。「そもそも幸せって何だ？」「大人になるってどういうこと？」「『がんばった』かどうかはどうすればわかるのだろう？」など、生徒はそれぞれが疑問文を作って、学習をスタートさせた。

(2) 指導方法・指導形態の工夫

①「答えを教えない」指導の徹底

生徒が立てた仮説は一人ひとり異なっており、1クラスの人数が約30人である。つまり、1つの学習において約30の仮説（＝課題）が教室内に存在する状況であった。生徒それぞれがもつ資質や能力、経験や知識、技能は同じではないことを考えると、クラス全員に均一な、同じ指導をするのは効果的ではない。いわゆる「できる」生徒はどんどん進められるし、「できない」生徒は全く筆が進まない。生徒一人ひとりにどんな声かけを行うべきか、私たち学年団は迷い、悩んだ。学年団で何度も話し合い、どんなサポートをするのがベストなのかを考えた。そこで、教師は徹底して、生徒へ疑問文を投げかけることにした。手が止まっている生徒を見つけては、「なぜ、こう考えたの？」「どうしてこれを調べようと思ったの？」など、とにかく疑問文を使って話しかけることにしたのだ。これが非常に効果的であった。生徒は自分の考えをなんとか教師へ説明しようと情報を整理し、思考していた。疑問文を投げかけるたびに、生徒の思考は深まっていくようであった。

②「思考と表現」のメリハリ

1時間の学習を「思考」と「表現」の2つに分けて行うことにした。「思考」の時間は友達や教員とは話をしない時間とし、静寂の中で自分の考えていることや調べたことを整理し、まとめる時間とした。「表現」の時間は自分の考えたことを積極的に説明する時間。自分が分かったことや考えたことを説明し、友達や教員からたくさんの疑問文をもらう時間であり、新たな課題を見つける時間である。そして、最後にもう一度「思考」の時間を確保する。これにより、「思考⇒表現⇒思考」のスパイラルができ、生徒は自分の力で学びを深めることができた。ある生徒が「先生！これって終わりがなくないですか！？どこまでも続きますよ！」と笑顔で話していたのが印象的であった。普段は書くことをあまり得意としていない生徒であったが、自分のレポート用紙がびっしり埋まっていくのを楽しんでいる様子であった。

③多様な調査方法の確保

この学習では、調査方法も生徒自身に考えさせ、選択させた。ある生徒は図書室の本を使って調べ、ある生徒は教員や友達にインタビューを行った。また、ある生徒はクロームブック（ノートPC）を使って情報を集めた。本校では、教具として全校生徒がクロームブックを持参して登校する。クロームブックの活用は、調べ学習においてとても有効であった。日本の中学校と比べて、図書室の蔵書に制限がある日本人学校において、たくさんの情報を引き出せるクロームブックは大変価値のあるものである。教師は生徒が「こうしたい！これで調べたい！」と思ったときに、それを可能な限り実現できるようにアドバイザーとして活動した。生徒ともに考え、ともに悩み、ともに解決する活動はとても楽しいものであった。

3．なぜ、何のために「働く」のか　～知識編～（6月～7月）　※職場体験プログラムを11月に実施

(1) 課題と学習内容

11月に実施する職場体験に向けての学習を6月にスタートさせた。1学期（6月～7月）を「知識編」、2学期（9月～11月）を「経験編」とした。「知識」は「経験」によって裏付けられて本物となる…働くとはどういうことか、自分はどのように働いていくか、自分なりに定義できるようになることを学習の最終目標とした。「知識編」では、次のような手順で学習をすすめた。

【1】「自分」「仕事」「将来の社会」の３つのキーワードを使って、疑問文をたくさんつくる。
★LEVEL１　⇒キーワードを１つ使って疑問文をつくる。
★LEVEL２　⇒キーワードを２つ使って疑問文をつくる。
★LEVEL３　⇒キーワードを３つ使って疑問文をつくる。
【2】疑問文の中から、自分が取り組む課題を決めて、課題解決を行う。
（考える、調べる、人に聞く、話し合う…など）
【3】考えたこと、調べたこと、話し合ったことをもとに、根拠と結論をまとめる。

疑問文に用いるキーワードの数でLEVEL（難易度）を設定した。難しい課題に挑戦したい生徒は、多くのキーワードを使って疑問文をつくる。例えば、「将来の社会において、自分がお金をたくさん稼げる仕事はどんな仕事か」（LEVEL３）などである。キーワードが増えることによって、考えることや調べることも多くなる。それまでの学習で疑問文を作るコツをつかんだ生徒は、どんどんと学習を進めることができた。一方、なかなか進められない生徒は難易度を下げて課題を作り、学習に取り組んだ。例えば、「将来の社会は今と比べて、どのように変化するか」（LEVEL１）などである。

⑵ 指導方法・指導形態の工夫

①「答えを教えない」指導の徹底　②「思考と表現」のメリハリ　③多様な調査方法の確保

④「オープンな学び」の実現

１年生も３年生も学校を離れての調査活動を行うため、２年生しか学校に残らないという１日があった。この日は教室の壁を取り払い、学校中を活用して学習を行うことにした。ある生徒は教室で調査を行い、ある生徒は図書室で思考を深める。ある生徒はシンガポーリアンの清掃員へ英語でインタビューを行い、ある生徒は校長室で校長先生へインタビューを行った。実際に働いている人の経験を伝えてほしいという目的を伝えて、他の教職員にもインタビューに協力してもらったが、それぞれが話すことは異なっており、それが生徒の新たな疑問につながっていたようであった。時間いっぱい一生懸命に活動する生徒の姿を見ることができた。クラスで学びを行う場合、「学びの可能性」は約30人分。それが学年全体へ広がることで、「学びの可能性」も約160人分に広がる。それが学校全体と広がることで、さらに大きく広がっていく、そうした可能性を感じた。

４．なぜ、何のために「働く」のか　～経験編～（９月～11月）　※職場体験プログラムを11月に実施

⑴ 課題と学習内容

課題：将来、あなたはなぜ、何のために働きますか。また、どのように働きたいですか。自分なりの結論をまとめなさい。ただし、「自分」「仕事」「将来の社会」のキーワードを使って、根拠を示すこと。

「経験編」では「知識編」で導き出した結論とその根拠をもとに、職場体験で何を見て、聞いて、体験してくるのか、課題を立てることから始めた。実際の現場でしか体験できないことはどんなことかを考えて課題を立てた。課題を立てて、職場体験に臨むことで、生徒が高い意欲をもって活動へ取り組むことができた。お世話になった各事業所からもたくさんのお褒めの言葉をいただいた。最終的に、「知識編」で導き出した結論と、「経験編」で解決した結論とを合わせてレポートを作成した。その際、論文（作文）でも、ポスターや新聞でも、クロームブックを活用したプレゼンテーションでも良し、とした。それにより、生徒がそれぞれの得意なことを生かしてまとめを作成することができた。

⑵ 指導方法・指導形態の工夫

①「答えを教えない」指導の徹底　②「思考と表現」のメリハリ

③生徒それぞれの特長を生かしたまとめの作成

先述のとおり、まとめ方をこちらで指定せず、生徒一人ひとりに選択させた。文章を書くのが得意な生徒は

論文形式のレポートを作成した。原稿用紙10枚以上書いている生徒もいた。絵の得意な生徒はポスターや新聞を選択していた。パソコンを活用することに長けた生徒はクロームブックを選択した。生徒それぞれが自分の「らしさ」を発揮して、充実した最終レポートを完成させることができた。

５．生き方を学ぶ、生き方を考える（11月～３月）　※修学旅行を２月に実施

(1) 課題と学習内容

修学旅行に向けての学習を11月末からスタートさせた。ベトナムはぐんぐんと経済成長を遂げる若い、エネルギーに溢れた国である。しかし、そうした“光”の部分だけがベトナムではない。ベトナム戦争や枯葉剤の影響に今なお苦しむ人々がいる…それも「今のベトナム」なのだ。今回の修学旅行では「ドクちゃん」の愛称で親しまれたドクさんの講話や、病気に苦しむ子どもが収容された孤児院や戦争証跡博物館なども行先として選定した。ベトナムで生きた人々、そこで暮らす人々の生き方を学ぶことを目的とした。また、シンガポールやベトナム、日本…将来、世界のどこかで生活する自分はどんな生き方をしたいと思うか、それを１年間の学びを締めくくる課題として設定した。学習の流れは次のとおりである。３つのステップを踏んで、学びを深めた。

STEP	生徒が設定する課題
1	「ベトナムってどんな国なんだろう？」という問いに対して、たくさんの視点からベトナムを説明しなさい。また、「ベトナムは日本（シンガポール）と比べて、（　　）である」という仮説に対して、根拠を示して、説明しなさい。
2	「将来、ベトナムと日本（シンガポール）はどんな国になるだろうか」という問いに対して、根拠を示して、説明しなさい。
3	【最終課題】「ここまでの１年間の学びを振り返って、どんな未来で、どんな生き方をしたいか。そして、そのために今の自分に何ができるだろうか」について自分の考えを説明しなさい。

(2) 指導方法・指導形態の工夫

①「答えを教えない」指導の徹底　②「思考と表現」のメリハリ　③多様な調査方法の確保

④つながりを意識した学習グループ

今回の学習は６クラスを２クラスずつの３つのグループに分けて行った。そのグループを１か月ごとに組み替えて学習を行った。これにより、生徒１人あたりの教員数を増やすことができ、より多くの疑問文を生徒と共有することができた。また、グループごとに学習の進度に差が出ることもプラスに作用した。どちらかのクラスがどちらかのクラスをリードするようになり、学年全体の学びが自然と向上していった。複数の教員で授業を展開することが、教員の不安や負担を軽減することにもつながった。最終レポートは全員が論文形式で自分の考えをまとめたが、総合的な学習で学んだことだけでなく、他教科で学んだことも関連付けて説明する生徒が多く、生徒が自分の知識や経験を引き出しているのがよくわかった。将来に向けて、自分の進路や生き方を前向きに、そして自主的に考えることができた。

６．おわりに

昨年度は「探究的な学習」というのを強く意識して取り組んだ。疑問文をつくることから学びが始まる、というのを常に心がけた。今後も、生徒と過ごす日々を大切にしながら、「教職」を探究し続けようと思う。